

公民館



「畑」と「田んぼ」のちがいを実感

昨年は「畑日記」を「田んぼ日記」に変えて、米づくりの状況をお知らせしてきました。今年は米づくりをやっていないのかと思っていらっしゃる人が多いと思います。安心して下さい。今年も青谷かみじち史跡公園と第2駐車場の間の田んぼで、去年と同様に米づくりを継続しています。

田んぼ仕事をしていると、思うことがたくさんあります。当たり前の事ばかりですが聞いてください。

◎稲作は畑仕事とは、広さも仕事量も次元が違う。

一枚の田んぼが1反およそ50m×20mなので、草を取るにしても広さが半端でないし、苗を植えた草刈り機は使いえない。次元が違う。

◎草が短いうちに取らないとどんどん大変なことになる。

草が生えている田んぼなんて見たことが無かったので、「田んぼに草は生えないものだ」と勝手に思っていました。現実、除草剤を蒔いたりこまめに草取りをしているから生えていないだけで、ほっておいたら、草が稲の背丈を超えてしまい、にっちもさっちもいなくなります。

◎絶対に機械は必要

家庭菜園程度の畑なら機械なしでも作ることができますが、田んぼはトラクター、田植え機、コンバイン(バインダー)などの機械が必要です。機械が無ければ、多くの人の協力とか牛とかが必要です。

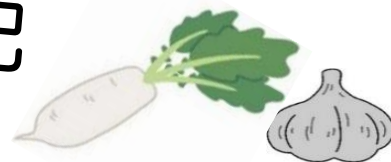
その他にも違いはたくさんあるでしょうが、「畑」と「田んぼ」は全然違うということです。弥生時代に米作りが始まって世の中が大きく変わったというのも、自分で米を作ってみて十分に納得できました。



鳥取県の人が発明したという草取りの道具 楽ではないが便利です



とくさんの畑日記



収穫を終えた達成感!!・・・次にすることは？

今回はどの野菜というわけではなく、「作り終えて次に何をするか」についての話です。

じゃがいもは6月には収穫し、今年はよくできた達成感を味わっていました。次に大根や玉ねぎ等を植えるまでには間があるので、私はそのまま1か月ほど畑をほったらかしにしていました。

私の近くでは、ハウレンソウを植えておられました。それを見て、

「私もハウレンソウを植えよう」

と思いました。しかし、草刈りからしなくてはなりません。そして石灰を蒔いて掘り起こし、少しおいてから畝を作って種を蒔きます。私の場合、しばらくほっておいたために、なかなか次の野菜に取り掛かれませんか。まあ、収穫してすぐ次の準備をするかどうかなんて、野菜作り以前の問題。今までの習慣とか性格の問題でしょう。私にはまだまだ修業が必要なようです・・・。



青谷バスは、今・・・



2年ほど前、日の丸バスが廃止され、現在は「青谷バス」が運行していますよね。どこに行くにも自家用車、或いは家族の運転する車を使う人が多いと思いますが、青谷バスがどのように運行しているか知らない方が多いのではないのでしょうか？

そこで、青谷バスの現在の状況を知るためにいろいろ調べ、さらに実際に乗って、運転手さんに話を聞いてみました。以下は私の主観で報告します。



まず、前日に電話で予約します。

※予約制: 予約すればいつでも来てくれるのではなく、時刻表にある便を予約するのです。手元に時刻表が無いと予約しづらいでしょう。予約は青谷タクシー(090-3522-0013)にします。

疑問1 どういう路線があるの？

①勝部線②日置線＝小・中学生の乗る便は、両線とも各町区のバス停と中学校(史跡公園東)・小学校を結びます。それ以外は、定時が午前・午後 各2便あり、他は予約制です。

③長和瀬絹見循環線＝小中学生が乗るもの以外は全て予約制です。

疑問2 青谷の町中を走るバスはあるの？

・「長和瀬絹見循環線」があります。青谷駅から夏泊⇒長和瀬⇒絹見⇒青谷駅と循環します。バス停は、緑町入口、ようこそ広場前、青谷海岸などがあります。

※運行状況によっては、バス停以外で乗り降りすることも可能だそうです。

疑問3 1日何便あるの？

・青谷地区の人に関係のある長和瀬絹見循環線は、概ね2時間に1本合計6便あります。

疑問4 何のために使うことが多いの？

・やはり買い物のためにサンマート、他には医院、美容院ですね。

疑問5 1日何人くらい乗っているの？

・長和瀬絹見循環線は、4人ほど定期的に乗車されますが、日によっては0の日もあるそうです。



私の感想 私の乗ったワゴン車は乗り心地良く、運転手さんも親切でした。しかし乗る人は少なく、今後、交通手段について考える必要がありそうだと思います。

おわりに

去年も暑かったけれど、今年も暑いですね。

さて、かつて最高気温記録を持ち、「日本一暑い街」で売り出していた熊谷市が、キャッチフレーズを「暑さ対策日本一」に方向転換したそうです。理由は、暑さをPRするよりも、市民や観光客の健康を守ることを最優先にし、暑さ対策が日本一進んでいる町へとイメージを変えたかったということです。なるほど、これなら市民や観光客の理解を得られるだろうと思います。

まちづくりには、このような柔軟で機転の利いた発想が必要なのではないでしょうか。